

---

# オヤジうさぎと愉快的日常

紫藤雪雫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オヤジつさぎと愉快的な日常

### 【Nコード】

N9431F

### 【作者名】

紫藤雪華

### 【あらすじ】

オヤジつさぎと呼ばれるつさぎを中心に繰り広げられる森の国でのお話

## 森の中で暮らすウサギ達の不思議な世界

ここは地球のどこにあるかもしれないとっても不思議だけど  
楽しいかも知れない国の物語

### 第一章 くプロローグ

今日も鳥たちが歌を奏でている  
そんな何も変哲もない朝のこと

「ふあゝもう朝か」

ん、此処は何処だおまえは誰だって？

そうか自己紹介がまだだったな

俺の名はオヤジうさぎ

オヤジと前についているがれっきとした兎だ！

え、変な名前だって！？そう言うことは作者に言え！！

俺だって好きでこんな名前になったわけではない！！

ってあ、ゴホン

気を取り直して続きだ

特徴は左右で長さが違う耳とこのおやじスタイルの服だ

好きなものは酒とたばこ

嫌いなものはカサカサ動く黒い化け物だ

まあ俺の紹介はこのぐらいにして此処は

森の国と呼ばれている摩訶不思議な国だ

コンコン

誰か来たみたいだいちお出よう

「誰だー？」

「誰じゃないでしょ！！オヤジうさぎさん！！」

「ああお前か、バツウサ」

「今日も仕事サボる気でしたね？」

「あ、いやそんな訳」

「言いわけは不要です！！」

「あなたの魂胆は丸見えですから！！」

「う」

こいつにはいろんな意味で叶わないからな

それに怒らすととてつもなく怖い

だから逆らえなかつたりする

あ！こっちの紹介もしなければ

こいつの名前はバツウサ

特徴はその名の通り目がバツテンになっていることだ

そして俺の仕事は・・・大工だ！！

これでもその世界ではちよつとは名は通っているだぜ！！

「あの〜誰に話しているんですか？そろそろ行かないと」

「ホントに遅刻ですよ？」

「え？・・・ああー！！ヤバイ〜怒るとホントに怖いだよあの上司！

」！

「まったく急ぎますよオヤジうさぎさん」

今日は仕事があるのでここまでだが今度来た時には

この国を紹介してやるから！！

でわまた〜！！

森の中で暮らすウサギ達の不思議な世界（後書き）

ええっとこんな小説ですが読んでくださった方々ありがとうございます！！

## 第二章　く大富豪紳士ウサギとお酒

このオヤジうさぎ達が住む場所・・・森の国の中でもっとものもので  
もっと栄えている中心街『ウリック』での一日

### 第二章　く大富豪紳士ウサギとお酒

ええ、ごっほん俺はオヤジうさぎであります!!

今回皆様には俺たちの住む森の国にある中心市ウリックを案内しま  
しょう

とその前に何か来てるようですね

パカパカ

ヒィィ

ガチャ（馬車のドワが開く音）

馬車が俺の目の前で止まった

「着きましたよ」

そう執事うさが言っただワ開けた先から出てきたのは

「やく御苦労。久しぶりだな！おやじ！」

俺のことをこのあだ名で呼ぶのは・・・

「本当に久しぶりだな！！紳士！！」

紹介しようこいつは紳士ウサギこの国一番の大金持ちで

俺の酒飲み仲間だ

特徴はシルクハットとステキでいつも持っているだ

「そういえば今日は何し来たんだ？」

紳士ウサギは買い物などは何もしなくても執事であるきぐるみウサ  
ギがやっているの

紳士ウサギ自ら来るのは非常に珍しいことである

「ん、今日は孫の誕生日プレゼントを買いに来たのだ」

「へ〜そうだったんだな。あの雪うさがか。早いな年がたつのが」

「そうなんだついこの前まで子供だと思っていたのにもう中校学舎に入るんだから」

中校学舎とはうさぎたちの学校である

ほかに小校学舎・高等学舎があり子うさぎたちは生まれ年から数えて10歳になると入学を始める

雪うさは紳士ウサギの息子の孫であるそして初孫なのでかなり激愛している

俺も屋敷に行ったときに何度か会っているので顔は知っている

それでもってかなりの美人だ（紳士が激愛するのもわかる気がする）

「あ、そうだよやじも一緒に選んでくれないか？そのほうが雪うさも喜ぶだろ」

しかし、雪うさはかなり俺に懐いている

こうして俺たちは紳士ウサギの馬車に乗って商店街に向かった

商店街はいろいろな店が密集していて森の国で一番にぎわっている

「ん、ここ何てどうだ？」

「おお、よさそうだ」

二人は街角にあったアクセサリィーショップに入った

ちなみにきぐるみウサギは馬車で待機している

「いらっしやいませ！！」

定員の明るい声が店に響いた

「色々あるな」

と紳士ウサギが悩んでいると

「何かお探しですか？」

「ああ、孫の誕生日プレゼントを探しているのですが」

「いいのが見つからなくて」

「どんなのをお求めですか？」  
「もうすぐ中学制なので可愛いのがいいですね」  
「でわ、こんなのはどうですか？今女子に人気なんですよ」  
そう言っただけで見たのは  
中心に赤い石がはめ込まれたペンダントだった  
「いいんじゃないか。雪うさが喜びそうじゃないか」  
「うんこれにしよう」  
「ありがとうございます。レジはこちらです。」  
そう言っただけで定員が紳士ウサギをレジまで連れてった

数分後

「お待たせ行こうか」  
「ああ」

馬車の中で二人は話していた

「今日はありがとうお礼に昼食は私が奢ろう何がいいオヤジ？」  
「お！良いのか？」  
「良いとも」  
「じゃ〜 ソフト梅焼き ！！」  
「ああ！あれか、私も久しぶりだよしきぐるみ《蓬萊縁》に向かっ  
てくれ」  
「はい、わかりました」

馬車は商店街から一本道を外れて木材出来た居酒屋で止まった  
パカパカ

ヒィ〜

「着きました」

「御苦労」

「ありがとうよきぐるみ！」

ガラガラ

「いつらしゃ、おお紳士にオヤジじゃないか」

「久しぶりだな鉄板兎」

鉄板兎はこの《蓬萊縁》店主でありオヤジうさぎと紳士ウサギの古なじみで

お酒とソフト梅焼きはここで食べると決めているくらい

よく来ている店である

ソフト梅焼きとはこの店の名物で小麦粉に卵やキャベツなどを入れた中に

梅干しを入れて鉄板で焼いてソースと青のりをかけたものである

「今日は何だ？」

「《ソフト梅焼き》を2つ」

「あいよ!」

数分後

「お待ちどうさま」

「ありがとうございます」

ぱっく

「う〜んうまい!やっぱり此処のが一番だな」

「そうだな」

「そう言ってもらえると作りがいがあるな」

そして食べながら3人は色々なこと話している

きぐるみウサギが店の中に入った

「失礼します」

「ん、どうしたきぐるみ？」

きぐるみウサギは紳士ウサギの耳元にそっと耳打ちをした

「実はかくかくしかじかで」

「そうか、分かった」

「それでは失礼します」

そう言っけきぐるみウサギは店から出て行った

「おやじ明日の雪うさの誕生会に来てくれないか？」

「どうしてだ？」

「実はさつき雪づさから来てくれないかと頼まれたんだ」

「うんそうか、分かったなら行こう」

「ありがとう、明日こちらから迎えの者をよこそう」

そうしてこの話は此処終了し今度はお酒を飲みながら話に花を咲かせた

二人が店を出るころにはすっかり夜になっていた

「ありがとうな送ってくれて」

「気にするな帰り道の途中だ」

「また、明日な」

「ああ」

「そろそろ出発します」

こうして馬車は遠ざかっていった

誕生会編へ続く

## 第二章 く大富豪紳士ウサギとお酒（後書き）

やっと更新しました

このへボ小説を読んでくださってありがとうございます

### 第三章 誕生会と書つた(前書き)

前回の続きです

### 第三章 誕生会と雪うさ

パカパカと馬の蹄を鳴らしながら走る馬車に揺られながらオヤジうさぎは森の国の中でも最も古い町・・・中称旧市街へと向かっていた

ちなみに馬車は紳士ウサギが家まで使いを出してくれた手綱を引いているのはきぐるみウサギが引いている

### 第三章 誕生会と雪うさ

パカパカひひひと馬の鳴き声が聞こえてから一軒の豪邸の門の前で馬車は止まった

ガチャ「おやじウサギ様着きました」

「お、ありがとよ、きぐるみ」

「いえ、わたしはこれで、でわまたあとで」

そうしてきぐるみウサギはまた馬車に乗り馬小屋の方に向かった

俺はそこから歩いて行くと目の前に大きな扉がありその扉を2回ほどノックした

トントン「はい、ただいまおあけます」とメイドの声がしたと同時にキーと古めかしい音共に玄関のドワが開いた

中に入っていくと「いらしゃいませ」とメイドたちがお辞儀をしてきた

だが、俺はこの感覚にはどうにもなじめないが

と、そこに「よお、オヤジよく来たな！」と紳士ウサギが出てきた

「こつちこそ招待状ありがとうな」

「いえいえ、まあ立ち話もなんだし中に入らないか？」

「ああそうだな」

こうして二人は家の中の一番広く今日のパーティーに使われる大ホールへと向かった

ホールの中にはもうすでに何羽ものうさぎが雪うさの為に集まってテーブルにはたくさんのおいしそうな料理にとても高そうなお酒などが並んでいた

「わーおさすが森の国一番のお金持ち！！」

「オヤジお皿はあそこにあるから食べてくるといい」

「サンキュー！！さーて何から食べようか」

オヤジうさぎは口には出ないがかなり食い意地が張っている

そしてしばらくしてお皿いっぱい料理を抱えたオヤジうさぎが戻ってきた

肉だんごをホクーに突き刺して食べてみた  
パク

「うめー口の中に肉汁がしみ込んでくるぜ」

と感想述べていた時だった

オヤジうさぎが料理に舌つずみをうっている間にも

行事はどんどん進んで行っていた時

突然ホール内に歓声が上がった今日の主役である雪うさぎが登場したのである

そして壇上が上がって進行をしていたウサギからマイクを渡されていた

「えーごっほん本日は私くしこと雪うさの誕生日会に来てくださって誠にありがとうございます。」

「皆様どうぞ今宵は楽しんでいってくださいね」と言って頭をぺこりと下げて

壇上降りて行った

「やっぱり可愛いな〜少し貴婦人に似てきたか」  
貴婦人とは雪うさの母親である

ちなみに本名で呼ばれるのを嫌うため紳士うさぎと夫とそのほかごく一部の

者しか本名を知らない。実の娘の雪うさにも知らせていない

なんて独り言を言っていると突然後ろから声をかけられた

「おやじさん!!」

「え、ああ！雪か！大きくなったな、最後に逢ったのは9歳ぐらいのころか？」

「違うよ〜！10歳のころだよ!!」

「ああ、そうだったな、そういえば、誕生日おめでとう！これは俺からだ」

とおやじウサギは腹巻から四角い箱を出した

「わーありがとうございます、開けていい？」

「どうぞ」

雪うさがきれいにラッピングされた箱を開けると中には  
薔薇の花が彫られたジュエリーボックスが入っていた

「かわいい！ありがとうございます、大事にするね」

「喜んでくれてよかった」

バツウサに黙って3日も仕事をさぼってよかったわ

(こらゝ仕事さぼらないで下さいよ〜byバツウサ)

「雪そこに居たの？」

「あ、貴婦人」

「あら、おやじさんもご一緒だったの」

「こんにちは貴婦人今日はお招きありがとうございます」

「いえ、雪のわがままに付き合ってもら」

「もう！余計のところまでいわないでよ！」  
といういろと話していると男の低い声がした

「あ、貴婦人此処に居たの！！」

声の主は貴婦人の夫で紳士うさぎの息子である  
槇ウサギだった

「ん、おやじさんと雪も一緒だったのか？」

「ああ、槇か！久しぶりだな！！」

「こちらこそ、久しぶりです」

おやじウサギと槇ウサギは紳士うさぎとの縁で知り合った

槇ウサギが小さい時からおやじウサギは家に入り出ており

槇ウサギはおやじウサギをもう一人の父のように慕っている

「まだ、あいさつまわり終わってないだろ」

「あら、そうだったわねさあ、行くわよ雪」

「はい、貴婦人、お父様」

「でわ、またあとでおやじさん」

「分かった」

そうして3人はまた客人たちの中に入っていった

「よしまた食いまくるぞう！！」

おやじウサギはスキップをしながらトレイに乗せられた豪華な食事を  
皿いっぱい持つていたその時だった

「あ、あの貴方はあの有名なおやじウサギ様ですよね」

少しトーンの高い女性特有の声が入ってきた

「ああ、俺がそうだが貴女はたしか・・・キャロットカンパニーの  
社長夫人の文月夫人じゃありませんか！」

キャロットカンパニーとは森の国の中でもトップ3に入る有名企業で  
人参の販売、輸入輸出をおもな仕事にしている紳士ウサギとも

取引をしている会社で文月夫人はその社長夫人である

文月夫人とは前に別荘の建築を依頼をおやじウサギの会社にした縁  
で知り合った

ただ、その時はおやじウサギは別の仕事で立ち会ってはいないため

直接会うのはこれが初めてだったりする

一度顔をお互い見たぐらいである

「まあ、嬉しいですわ覚えててくれたんですか」

「ええもちろんですともこんなに美しい方を忘れるなんてしませんよ」

「ふふ、御冗談を」

「そういえば、何かご用でも？」

「ああ、そうでしたわまた、貴方の会社に仕事を依頼したいですわ「仕事を？ええ良いですとも、それで内容は？」

「良かった、内容はですね南町に孤児院を作る計画がありましたその家の建築を依頼したいんですわ」

キャロットカンパニーは売上の一部を身寄りのない子ウサギ達に寄付する運動をしているため一般民からの支持も良い

「孤児院ですか、判りました良いでしょううお引き受けしましょう」

「！！ありがとうございます、詳しく事はまた後日会社で」

「分かりました」

「でわ、また」

そう言つて文月夫人は去つていった

そんなこんなで夜もすっかり更けてパーティもお開きに

最後は雪うさの一言で

「皆様今日はお楽しみいただけただけでしょうか、これで今宵はお開きとさせていただきます」

「さてと、俺も帰るとするか」

「では馬車をお出します」

「え、いいのか？きぐるみ」

「はい、旦那さまからのご命令です」

「そうか紳士がかならお言葉に甘えるとするか」

と玄関に向かったその時紳士から貰ったであろうネックレスを付けた

雪つさに呼び止められた

「おやじさん！！今日は楽しかったですか？」

「ああ、とっても良かったぜ！」

「そうですか、なら良かったですジュエリーボックス大切にします

ね

「ん、もう行くな」

「はい、じゃさようなら」

「おう、ばいばい」

こうして雪つさの誕生日会は幕をとじた

### 第三章 誕生会と雪うさぎ(後書き)

また読んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9431f/>

---

オヤジうさぎと愉快的日常

2010年10月10日02時52分発行